

第3回三条市食育推進及び農業振興審議会 会議録

- 1 日 時 平成22年2月23日(火) 午後1時30分～3時30分
- 2 会 場 三条市東公民館 会議室
- 3 出席委員 姉齒暁 上村旭 皆川邦子 野崎文夫 高野万里子 樋口洋平
星野正義 阿部僚一(代理:歌川孝子) 佐藤幸治 小林律子 小林武良
- 4 欠席委員 西光明 片山和英 外山迪子 長岡信治

5 説明のための出席者

- (事務局) 木村経済部長 高柳福祉保健部長 波多野健康づくり課長
吉野農林課長 板垣農林課課長補佐 田村食育推進室長
大泉技師 小柳技師

- 6 報道機関 三条新聞社

7 議 題

- (1) 第2次三条市食育推進計画(案)について
- (2) 平成22年度 三条市農業活性化プラン実施状況について
- (3) 平成22年度 三条市食育推進事業実施状況
- (4) 平成23年度 三条市農業活性化プラン推進事業計画について
- (5) 平成23年度 三条市食育推進事業計画について
- (6) 三条市農業活性化プラン策定について
- (7) その他

- 8 開 会 午後1時30分(委員の過半数出席により会議成立)

9 経過と質疑

～各議題について、事務局説明後質疑～

- (1) 第2次三条市食育推進計画(案)について
～質疑なし～

- (2) 平成22年度 三条市農業活性化プラン実施状況について

【小林(武)委員】三条市の米を荒川区や横浜市などへ販路開拓されていることはありがたいと思う。三条の水で米を炊いたほうがおいしいので、せっかく米を売るなら

下田の千年悠水も一緒に売ってもらいたい。水には経費がかかると聞いたが、他県でペットボトル詰めしているのでは高速代など運送費がかかるのではないか。下田地区でペットボトル化をして売るシステムを作ったらどうか。

今は上海までに販路拡大をしているような国際化の時代なので、国内および海外で売れるシステムをできないものか。

【吉野農林課長】千年悠水は群馬県の方で精製をしてペットボトル化して販売しており、市の PR 事業に大きな商材として活用している。ペットボトル化施設を新たに建設することは相当の投資になると思われるので、今後の方向性について検討する必要がある。費用対効果も検討しなければいけない。現在、定価 100 円での提供が費用対効果としてベストであると考えている。施設建設をすることで、価格が上がるようでは困るので、費用対効果を見た中で水道局と検討していき結果を審議会の中で報告していきたい。

【小林(武)委員】コストの問題があると思うが、80 円ぐらいになれば海外にも出て行けると思う。また、地元でペットボトル化する施設ができれば市民の雇用にもつながるので検討していただきたい。

【野崎委員】学校給食米及び荒川区などへ出している米は特別栽培米と明記されているが、特別栽培米は JA の「こだわり米」と「学校給食米」の 2 つあり、作り方は一緒だと思うが、荒川区などに出している米はどういった違いがあるのか。

【板垣農林課長補佐】同様に県の特別栽培米の基準に沿った 5 割減のものを出している。

【野崎委員】県認証と三条市の特別栽培でやっている米はどれぐらいの違いがあるのか。三条市の基準が非常に高く、農家が困っている。昨年のように米が不作の場合にこだわり米や学校給食米を辞めて、普通の米を作って収量を上げたいという声が出ている。そのような中で 23 年度取組むことは困難を招くのではないか。できれば困難を招かないよう県認証や三条市の特別栽培米といった差を付けない方が、同じ三条産米として流通出来るのではないか。かたや県認証、かたや三条のブランド米といった差が出なくても良いと考えている。

【吉野農林課長】市内の学校給食では有機米と特別栽培米である。特別栽培米は肥料と農薬を一般米より 5 割減らして作っている。JA のこだわり米についても農薬と肥料は 5 割減で作られており、ベースは同じと考えている。学校給食に使われる米は JA の栽培指針に基づいて統一した形で栽培してもらっている。ここで農家の方にはご苦勞をいただいている。今後とも環境に優しい農業ということで、環境の直接支払いも国の農政の中では平成 23 年度から実施されるという形できている。地球温暖化や CO2 の削減から見ても大きな流れは変えられないだろうと思う。その意味では農業者からもご協力いただきながら、より安心安全な取組をしていかなければいけない。現在では特別栽培米の作付面積は 450 ヘクタール強となっており、全体の 1 割以上になっている。これが 2~3 割、長期的なスタンスで見れば半分以上が特

別栽培米にシフトしていくと思う。そうなれば、学校給食のみでなく、市民にも供給ができる。JA と連携をはかりながら進めていきたい。また、学校給食米ブランド販路拡大事業について、地産地消のもと付加価値をつけながら、野崎委員の意見も考慮しながら進めていきたい。

【野崎委員】今年度から国では食用は作らず備蓄米を作れと言われた。備蓄米というのは鳥が食べるエサ米である。今まで加工米制度があったにも関わらず、新潟県は米が高いので備蓄米制度を作れと言われたのだと思う。安い米を作って採算があるのかというと、これを作るようになると農家は破滅状態になると思う。そんな中、ある農家から、安い米を作ることにすれば苦勞して作らなくてもよい、という話が出た。そうなったら米を作る人が減り、環境にも問題が出るのではないか。農家は基準反収を目標として収量をとっていかねばいけないという認識でいる。特別栽培米だけでなく、一般目線の中で今後三条市がどう取組んでいくか検討してしてもらいたい。

【姉齒会長】この審議会は食と農の問題をどう組み合わせしていくのかを審議するものであるし、三条市は食育の基本に農業をきちんと据えている点が全国から支持されていると思う。しかし、農業は衰退するに任せて、食育で穴埋めをしていくということになってはいけないのではないか。三条だけでも農業をどう守っていくのか、農業をどうやって盛り上げていくのかという姿勢を貫き通さなければいけない。食の生産基盤である農家がなくなれば、どこから米を調達すればいいかわからなくなる。台湾から米が輸入され子どもたちに提供しなければいけない時代が来るかもしれない。

【野崎委員】最近、大崎小学校の5年生に農業について話をした。その中で学校給食が米飯ということもあり、子どもたちは米粉に非常に興味を持っていると感じた。米粉について学校給食に導入できないのかと子どもに聞かれた。そういった声もあることを認識してもらいたい。

【田村食育推進室長】子どもたちは知識が少ない中でそのようなことを思うだろうことは想定できる。5年生は特に食育に力を入れている学年であるが、まだ十分ではない。市としては日本人が主食として常に食べるものは、ご飯が一番良いことは常々伝えているが、これからも働きかけていきたい。

【姉齒会長】米粉に関心を持っているということで、米粉を給食に導入してほしいという意味は、米粉を使ったパンを出して欲しいということではないのか。

【野崎委員】米粉を使う制度があるので、なぜ使わないかということである。子どもたちは我々よりも興味を持って見ている。鋭い質問もされる。大崎地区に米が作られなくなったらどうなるのかという質問もされた。稲がないと夏場は虫が出て大変で、稲がある自然の風景も人が作っているのだと教えた。稲があるおかげで草が生えないので虫が出ないこと、草が生えている田んぼは肥料が少ないことを教えると、それを自分たちに提供してくださいと言う。子どもたちは本当に単純で、米に

も非常に興味を持っていると感じた。

【小林(武)委員】三条地域は地場産業の金物があるために、出稼ぎにでなくてもよいという地域だと思うが、商工ばかりで農を置き去りにしがちである。農工商が一緒に健勝ある発展が大事だと思う。農業の後継者を育成しながら、食育をすすめてほしい。

【野崎委員】今年度は自分が入退院を繰り返していた中で、関東方面に向けて息子と米のカタログを作った。アパートがあって田んぼがあって、弥彦山が見えるという市民には当たり前の風景を見て、買おうという気になってくれた人がいた。米も好評で既に売り切れてしまった。田舎の風景だけでなく、都会の人たちの認識を覆すような働きかけもいいのではないかと。都会の人は三条市と聞いても、どんな地域か分からない。三条まんま塾のカレンダーも大々的に PR しながら進めていったらよいのではないかと。北五百川の棚田のような風景だけでなく、工業地帯の中に田んぼがあるというような風景も紹介することもいいのではないかと。

【姉齒会長】前回も新潟県民は宣伝が下手という話がでた。そういったことも含めてイメージをきちんと伝えていくことが大事ということか。

【野崎委員】ある人に三条は考え方が間違っているのではないかと言われた。三条市は下田地区だけではない。旧三条市でも農業を一生懸命やっている人がいるのだから、そういう人たちにも手を差し伸べるべきでないかと思う。

【姉齒会長】中国向けの販路拡大事業では実際に商談は成立したのか。

【吉野農林課長】昨年、上海市内のレストランなどで宣伝を行ってきた。新潟の一般コシヒカリは中国に約 30 トン渡っている。主に中国の富裕層を対象にして、贈答用に使われている。上海に送るには物流の問題を解決しないと難しい。新潟県と農林通産副大臣が中国政府と話し合い、今後 30 万トン位は出していく方向で商談がまとまっている。中国側は輸入するにあたって燻蒸をしたものではないと受け入れないという話である。そういう設備を作らなければいけないということで、新潟県では倉庫業者が手を挙げている。それが整うと中国のチンタオ経由で新潟の米が運ばれる。国の政策とマッチングしながら新潟産コシヒカリの輸出を進めていくことになる。今後は市町村でなく、JA で一括して手あげ方式で輸出米を作っていく形になるイメージでいる。

【姉齒会長】中国に輸出するとなると、裏返すと非常にリスクが高く、向こうから入ってくる米もあるということ。輸入した米は安いので外食産業などに流され、日本のおいしい三条のコシヒカリを中国の富裕層が買って、日本の貧しい人が中国や台湾などの安い米を食べることにならないかという危険性も感じる。おいしい国産米をずっと食べ続けたい。

【野崎委員】中国への輸出米が 30 万トンと単位が違って来たということは聞いたが、6月の TPP 絡みじゃないかと思っている。会長が言ったように、中国の米が入ってくると一般のうるち米を食べていた市民が、中国やオーストラリア、タイ米など安

い米を買わざるを得ない事態を招くのではないか。燕三条の中では TPP が結構だという社長もいるし、下請の一般工業関係の人たちは非常に困ったという話で、農家共々一緒に手を組んでいこうと言っている。おそらく TPP 絡みで 30 万トンという数字が出されたと思うがそれについてはどうか。

【吉野農林課長】これは TPP とは別次元の問題だと理解している。TPP の問題は市長が議会でも答弁しているが、一概に言える問題ではない。農業、工業、商業、あるいは教育、医療、福祉いろんな部分にわたっての交渉になる。関税がゼロになった時にどう影響がでるか国の機関では試算している。安い米が多く入ってきたとき、農林水産省の試算によれば新潟コシは残ると言っているが、その他は残らない試算である。そんなことはないだろうし、そうすると新潟コシですら生き残れない。私たちの住んでいる国土、地域がどんな風が変わっていくのか。荒廃原野ができあがるのか。その部分だけでなく多面的機能の価値を含みながら農業の議論をしてかなければいけない。あるいは商工業の部分でも、小林委員の発言のような「商工業を維持していくことは農業にとっても大事だ」ということを十分に議論した上での国家の決断なので、今後も見守っていかなければいけないと思う。

(3) 平成 22 年度 三条市食育推進事業実施状況
～質疑なし～

(4) 平成 23 年度 三条市農業活性化プラン推進事業計画について

【小林(武)委員】2(1)良質堆肥の有効利用検討事務というのがあるが、山形県の長井市では家庭から出る残渣、残飯をすべて集めて、良質堆肥を作る意味で堆肥工場を作って処理し、それを袋で売っている状態だと思う。三条市でも一挙には出来ないと思うが、そんな風に検討していつか将来的に生ゴミを堆肥化できないか考えていただきたい。

【板垣農林課課長補佐】長井市を見学させていただき、本当に地元への PR が良くされていると感じた。普通ゴミ箱等に入った生ゴミを集めるとスプーンや茶碗が入っているなど選別が大変だそうだが、長井市では PR が行き届いていて何千世帯分の生ゴミを集めてもほとんど異物が出てこないため、安く良質の堆肥が循環している。市民への PR を良くした中で進めて行ければと思っている。しかし、三条市は学校給食と工場などの残渣を集めて農家が使える良質な堆肥を目指し、いろいろな処理施設があるが、堆肥が余って使え切れていない現状がある。前段階として、農家から良い堆肥だと言ってもらえるものを目指して、モデル地区を設けて試験的に実施する計画が環境課の方であるので、段階を踏みながら検討していきたい。

【野崎委員】堆肥は良いというのは分かっているが、農家が産業廃棄物として廃棄している。特に米糠の処理に困っている。田んぼにまけばいいと言われるが、それをやるには非常にコストがかかるので避けている。今まで果樹農家が利用していた

が、糠をまくと草が生えやすく草取りにコストがかかるので最近堆肥を使わなくなってきており、止むを得ず糠を燃やしている農家もいる。行政で代官島に堆肥センターを作ったが、それは果樹や庭木の枝などを対象にしている。しかし、その堆肥すらも出ていかないと聞いている。行政の方で堆肥センターを作り、糠の処理についても検討課題にして欲しい。

二点目は、農業の体験学習について。昨年振興局からの依頼で、中学生が農業体験に4名来た。農薬を使っていないので、子どもたちには8反ほどの面積を草とりしてもらった。草取りをしたのはいい体験だったという話を聞いた。中学生も常識範囲が分かってくる中で、こういう体験学習をやってもらいたいと思っている。

【田村食育推進室長】学校からは農業だけでなく、市役所やいろいろな分野への職業体験を行っているが、その中の一つだったのではないかと思う。

【佐藤副会長】どこの学校も中学2年生で職場体験をするが、総合学習にて自分たちで目的を決めて取組むので、店の販売員的な業種に職業体験をする子が多い。それだと非常に偏った職業体験になってしまう。大島中学校区は果樹農家から協力いただきながら1年生に全員職業体験をし、2年生でも更にもう1度職業体験をしている。うちの学校は小さいのでそこまでできるが、他の学校ではなかなか手がまわらないと思う。他の学校にも出来るだけ農業体験を勧めていきたいとは思いますが、職員から行きなさいというのは本来の目的から外れてしまうので難しい所である。

【星野委員】堆肥について、現在は学校給食を1日1トンから1トン半処理している。もみ殻の方も水分調整材を使って処理している。狭い所で最低限の設備しかないのもみ殻やバイオマスについても検討したいという話は出ている。堆肥は畑を中心に出している。一般事業所や家庭ゴミを持ってくると異物が入ってくる場合があるので大変な作業になる。そのため学校給食などから堆肥を作っているような状況である。

(5) 平成23年度 三条市食育推進事業計画について

【阿部委員代理：歌川】3学校食育推進事業の(7)高校生対象の食育について、平成22年度には実際に事業を実施したようだが、高校生の反応はどういったものなのか。

【小柳技師】朝食を簡単に済ませている生徒や、昼食もコンビニや売店のパン、清涼飲料水をとる機会が多い様子があった。生徒の反応としては清涼飲料水の砂糖の量に衝撃を受け、多く摂り過ぎていたところに気づいた様子であった。県央工業なので男子生徒が中心で、調理技術を教えるというところまではまだ授業内容が行き届いていないが、料理をどう選ぶかというところを教えていくのが課題であると思っている。授業の中で、体組成測定をすると高校生でも30～40代の体年齢で出る生徒がおり、自分の体を知ることで自分の普段の食生活の問題を振り返る機会となっていた様子であった。

【阿部委員代理：歌川】最近出た学生の3食の写真を撮った本を見ると、どうして

こういう食事形態になるのかと感じた。高校生はいずれ母親になり、家庭をもつ訳なので小さい頃の食生活も大事だが、高校生ぐらいに3食の大切さなどを教えていくべきだと思った。

【田村食育推進室長】高校生について以前の審議会でも上村先生や皆川委員から高校生の食育が大事な時期だという話を出していただいた。高校が県立ということもあり介入していくことが難しい状態だが、偶然に職員の知り合いが県央工業にいたことから、3年ほど連続して実施している。行ってきた感想を聞くと、そっぽを向いている生徒もいるらしいが、アンケートを取ると良い気付きがみられる。子どもたちは無関心を装いながら、1回の授業が染みているのではないかと思う。しかし、高校時分のたった一回でどれ位の効果があるのかと感じている。三条市では保育所からの食育に非常に力を入れている。ここをきちんと変えていくことで中学校、高校、成人へとつなげていければと思っている。高校生を大事と思いながらもそこに関わる場面やマンパワーが不足しているという実情もあるが、高校生は大切な時期と考えている。

【阿部委員代理：歌川】上越の商業高校で、自分で主食・主菜・副菜を何品か作ってみて、自分の適性体重のカロリーにあったお弁当箱が大・中・小とあり、それに詰めてバランスを栄養士に見てもらい、アドバイスをもらうという取組をしている。いろんなところでイベント的な取組はしていると思う。

【姉歯会長】イベント的には取組んでも、三条市のように毎日米飯にするというように教育は継続的に行わないといけない。大学に入ると大学生協があって、麦ごはんが出たり、揚げ出し豆腐が出たりして自然に選んでいくが、高校は意外に穴ではないかと思う。

【野崎委員】参考までに聞かせていただきたいが、離乳食相談会では離乳食をどのような内容で指導しているのか。薬局などではインスタントやレンジでチンするようなものがたくさん売っているが、そういったものを指導しているのかどうか。

【田村食育推進室長】離乳食相談会は5か月児対象と7か月児対象の2回ある。5か月児対象の教室では離乳食の調理実習を行っている。おんぶをしない方が多いので、おんぶをしながら調理実習をしている。実習内容は大人が食べるみそ汁から離乳食を取り分けることを行っている。その他に講話、個別相談も実施している。7か月児対象の教室では、食生活改善推進委員から試食を作ってもらい、実際に食べさせている。その時に赤ちゃんがおいしい顔をするので、写真をまんま塾のカレンダーにも使わせてもらっている。7か月児対象の相談会でも離乳食の進め方や母親の悩みを解決するよう努めている。レトルトや瓶詰のものは活用方法について紹介する程度である。

【姉歯会長】離乳食の指導をする時は、100%が女性なのか。

【小柳技師】お父さんが一緒に参加する場合もある。

【皆川委員】妊婦教室の事だが、平成22年度の実績を見るとパパママ教室という

ことで集団指導となっているが、平成 23 年度の計画では妊婦教室での栄養指導となっている。食育なのか、栄養指導という妊婦さんが食事の中で気を付けなければいけない指導なのか。これから家庭を持っていくパパとママに来てもらって、子供を育てていく中で、基本的な部分の食育が出来たら良いと思っている。その前の高校生にもう少し関わっていきたいが、なかなか市としては難しい中で、ここで関わるのが大事ではないか。高齢者は食生活を変えていくのはなかなか難しいと聞いているので、若いこれから子供を育てて気を付けていかなければいけない人たちを捕まえて、シリーズ化してやっていかなければいけないのではないかな。

【田村食育推進室長】妊婦教室について、栄養指導とあわせて食育的な取組を意識していきたいと思う。

【高野委員】黒酢を飲むなど健康に気を使っている人が、赤ちゃんに乳酸菌飲料を飲ませて歯のケアを行わなかったために歯をボロボロにさせてしまうという記事を新聞で見た。私たちが当たり前と思っていることも、分かっていないのだということから始めないといけないというのがショックだった。

(6) 三条市農業活性化プラン策定について

～質疑なし～

(7) その他

～特になし～

10 閉会

木村経済部長より、委員の皆様へ任期の 2 年間審議会に参加頂いたお礼と、三条市では平成 23 年度予算の中で地産地消の推進の取組に力を入れていること、北海道を例に挙げ地元のを地元で消費する取組を三条から先頭を切ってやっていかなければいけないこと、製造業や農家の方が同じ目線の中で地産地消を実践していかないと消費者の理解が得られないこと、消費者も一緒に地元のを消費していくという運動を食育と農業の審議会から起こしていただきたい旨の挨拶があった。

(3 時 40 分終了)